眼を養い手を練れ

宮脇檀住宅設計塾

宮脇塾講師室編著

彰国社

宮脇　檀（みやわき　まゆみ）

一九三六年　愛知県名古屋市生まれ
一九五九年　東京芸術大学美術学部建築科卒業
一九六一年　東京大学大学院修士課程修了
法政大学、東京大学、共立女子大学などの非常勤講師、日本建築家協会理事、東京建築士会評議員、日本建築学会委員を歴任
一九六四年　宮脇檀建築研究室設立
一九九一年　日本大学生産工学部建築工学科研究所教授
一九九八年　逝去　享年六十二歳

主な受賞
一九七八年商業空間デザイン特別賞、一九八〇年日本建築学会賞作品賞、一九八五年第1回兵庫県みどりの建築賞、緑の都市賞建設大臣賞、一九八六年港区都市型住宅市街地設計競技最優秀賞、一九八九年第1回福岡県建築住宅文化賞、一九九四年第4回兵庫さわやか街づくり賞、一九九七年福岡市都市景観賞、一九九八年Gマークアーバンデザイン賞ほか

主な著書
『現代建築用語録』（コンペイトウと共著）彰国社／一九七一年
『日本の住宅設計』（編著）彰国社／一九七六年
『吉村順三のディテール』（吉村順三と共著）彰国社／一九七九年
『日曜日の住居学』丸善／一九八三年、講談社＋α文庫／一九九五年
『宮脇檀の住宅設計ノウハウ』丸善／一九八七年
『宮脇檀の住宅』丸善／一九九六年ほか

主な作品
●住宅／もうびいでいっく、あかりのや、ブルーボックスハウス、松川ボックス、名越邸、中山邸ほか　●公共施設／出石町役場、出石町立中学校、出石町立伊藤美術館、安来和鋼博物館、姫路市書写の里美術工芸館ほか　●住宅地開発／高須ニュータウン、高幡鹿島台ガーデン54、フォレステージ高幡鹿島台、シーサイドももち、高須青葉台づくりほか

宮脇塾講師室

岩井達弥　岩井達弥光景デザイン事務所代表　日本大学生産工学部建築工学科非常勤講師　女子美術大学短期大学部空間インターフェイス系非常勤講師
木下庸子　設計組織ＡＤＨ代表　日本大学生産工学部建築工学科非常勤講師　芝浦工業大学工学部建築工学科非常勤講師
杉浦伝宗　アーツ&クラフツ建築研究所代表　東京理科大学非常勤講師
曽根陽子　日本大学生産工学部建築工学科教授
中村好文　レミングハウス代表、日本大学生産工学部建築工学科居住空間コース教授
中山繁信　ＴＥＳＳ計画研究所主宰　工学院大学工学部建築学科教授　日本大学生産工学部建築工学科居住空間コース非常勤講師
諸角　敬　Ｓｔｕｄｉｏ Ａ主宰　工学院大学工学部建築学科非常勤講師
八木健一　八木造景研究室主宰　日本大学芸術学部、生産工学部および山口大学工学部非常勤講師
矢崎梨恵　千葉ミサワホーム勤務　福祉住環境コーディネーター

装丁・本文レイアウト　山口デザイン事務所　山口信博、狩野幸洋

はじめに

中村好文

建築家の宮脇檀氏は「口八丁手八丁」と「多芸多才」という言葉を絵に描いたような人物だった。

「口八丁」から紹介すれば、氏は多いときには年間に何十回という講演会、座談会、対談をこなす話術の達人だった。

そうした巧みな話術はそのまま文章に移され、エッセイスト、文筆家としての活躍もまた目覚ましかった。

軽妙な語り口で語られる建築論、住宅論、家族論は、分かりやすい、読みやすい、愉しい文章として高い人気を博し、建築関係者ばかりでなく、主婦層をはじめ多くの一般読者層を獲得した。

「手八丁」は、当然、本職の建築設計ということになるだろう。

建築家としては、住宅はもちろん、住宅地の地域計画、銀行、学校、庁舎、美術館、飲食店など、ジャンルにも規模にもこだわることなく満々の自信で取り組み、晩年には超高層ビルの設計にも並々ならぬ意欲を燃やしていた。

宮脇檀氏の創作を支えていたものは、洗練された都会的なセンスと、古今東西の建築から素早くかつ貪欲に学ぶ研究心、百戦錬磨のテクニック、そして万年青年のようにしなやかな精神であり、その作品にはいつでも「通俗性」を超えた、最良の「大衆性」（ポピュラリティ）が感じられた。

つまり、いわゆる建築家にありがちな自意識過剰の衒学趣味や深刻趣味はまるでなく、その作品も文章も、だれが見ても、だれが読んでも気さくで分かりやすかったのである。

しかし、その多面的な活動の中で、やはり最も力を注いだのは、「住宅」の設計であったと思う。宮脇氏は住宅設計という、雑務も気苦労も多く、考えようによれば、やっかいで割りの悪い仕事を、自身の生涯のテーマに位置づけて、丸ごと、そして心から愛していたのである。

建築家としてのスタートからゴールまでを真っ直ぐに貫いていたのはその住宅設計への執着と愛情であり、結果として、つねに日本の住宅設計のトッププランナーとして走り続けるこ

とになった。

さて、実はもうひとつ、宮脇檀氏には生涯にわたって情熱を注ぎ続けた忘れることのできない大きなライフワークがあった。

「教師」の仕事である。

宮脇流の「口八丁手八丁」と「多芸多才」の双方を余すところなく開陳でき、活用することのできる職業と立場を考えると、教育の現場ぐらい最適な場所はなかったろう。その教育の現場を、つまり教師であることを、宮脇氏ほど誇りに思い、誠心誠意取り組んだ人物を私は他に知らない。

その熱中ぶりを私が身近に感じたまま、打ち明け話風に書くと、実は宮脇氏は根っからの「教えたがり屋」だったのである。

建築に関することは言うに及ばず、旅の話や食事の話になれば、日本であれ海外であれ、どこの街の、どのレストランの何が、どの季節に行けば一番美味しいかを「教えてくれる」し、ファッションならスーツ、ネクタイから靴下にいたるまで、どのデザイナーのものが機能性に優れており、品質が良く、かつ美しいか、そしてその優れものを自分は何枚持っているかまで「教えてくれる」のである。

こんな調子で「映画」にしろ、「本」にしろ、「家具」にしろ、「雑貨小物」にしろ、「車」にしろ、「古道具」にしろ、ときには「ストリップ劇場」の裏情報にしろ……つまりどんなことに関しても持ち前の好奇心で掻き集めた豊富な知識と自身の経験から得た教訓をサービス満点、得意満面で「教えたがる」人だったのである。

そして、宮脇檀氏の生まれつきの性癖である「教えたがり屋」の虫の気の済むまで、じっくり本腰を入れて取り組むことができる地位と機会が巡って来た。

日本大学生産工学部に「居住空間デザインコース」という名で開設された住宅設計を重点的に教える特設コースがそれであり、宮脇氏はその主任教授に任命されたのである。

大学側の絶対の信頼と理解があり、特設コースは宮脇檀氏にその教育方針も運営もすべて「おまかせ」という、宮脇氏にとっては、それまでの教師経験の集大成となる、またとない教育の現場となったのである。

宮脇氏は少人数の女子学生だけを対象としたこの特設コースを宮脇檀の「住宅設計塾」と考えており、自ら塾長を名乗った。そして、「住宅設計塾」は講師の人選もまた宮脇流でユニークだった。学閥を嫌い、ややこしい人脈の繋がりを嫌う宮脇氏は講師として「これぞ」と思う人物があれば、回りくどい根回しなどせずいきなり本人に電話をかけて、講師になってくれるよう依頼をしたのだ。

それが「宮脇塾の先生になってくれるかな?」「いいとも!」

というあの呼吸の、言わば「いいとも方式」、あるいは「テレフォンショッキング方式」である。

このように、選ばれ方はあくまでもざっくばらんな「いいとも方式」であったが、講師たちには何となく選ばれた「七人の侍」に似た運命共同体的同胞感が芽生えたのだった。

ここで、宮脇氏は私たち講師にとってもかけがえのない先生だったことも書いておきたい。私たちは宮脇氏から自分たちも直接「学びながら、教える」願ってもない幸福を味わうことができたのである。

この本は、その「宮脇檀の住宅設計塾」の実践的で刺激的な教育や、教室にみなぎった熱気を再現し伝えることを目的として生まれた。もちろん、筆者はすべて宮脇氏とともに教壇に立った宮脇塾の「八人の講師」たちである。

住宅を学ぶ学生はもちろん、これから住宅を建てようと考えている人、住宅に大きな興味を寄せている人たちなど、この本を読むことで、あなたも「宮脇檀の住宅設計塾」の生徒となることができるのである。

「さ、授業開始のベルが鳴っている!」

心を引き締め、目を輝かせて「塾」の椅子に着席しようではないか。

二〇〇三年一月吉日

眼を養い　手を練れ　目次

はじめに ……3

第一章 宮脇檀の住宅設計塾へようこそ！ ……10

宮脇塾の目指すもの／学習（テキスト）の内容と方針／体で覚える／模型を作ろう／良い建築を見よう／スケッチしよう／美術や美しいものを見よう／よい家具に触れよう／クラフトしてみよう／手始めに、自分が今住んでいる住まい、空間を考え直してみよう

第二章 設計してみよう。ではどんな家を ……16

コンセプトは明瞭に　宮脇檀の住宅タイトルに見るキーワード／家を建てる目的とは／予備知識を身につけよう　セームスケールで見る若き宮脇檀を刺激した世界の有名住宅建築／構造がわからないので図面が描けない人のために

第三章 敷地を読む ……36

設計を始める前に／名作住宅に見る敷地との関係／土地の魂を感じる／敷地を調べる……周囲の状況／敷地を調べる……環境条件／土地に調和する／周囲と対立する／高低差のある敷地／不整形な敷地／「地」と「図」／外と内の繋ぎ目／「見る」「開く」テクニック／「隠す」「守る」テクニック／他人の受入れ方／自分の家は他人の環境

第四章 図面を描こう ……54

立体を平面上に表す　立体→平面→立体／図面はどのようなものか／大事な寸法／縮めなければ建築は描けない／記号は建築の道路標識／建築の引立て役……添景（点景）／優れた図面から学ぼう／まずは平面図（Plan）から／平面図を描いてみよう／敷地と建物の関係が重要……配置図（Site plan）／立面図（Elevation）は建物の容姿／建物を「切って」描く断面図（Section）／立体的に描いてみる……「縮尺のある透視図」／一点透視図法／二点透視図法（有角透視図法）／模型を作ろう／模型を撮ろう

第五章 住宅を内部から考える ……80

部屋のプロポーションはプランニングの第一歩／イメージ具体化のための知識と技術／普段、居るところを考える……広い居間、数ある機能／食べるところを考える／寝るところを考える／収納するところを考える／家の構成を考える／そのほか大切な工夫あれこれ

第六章 家具を学ぶこと、家具から学ぶこと ……106
では、どんな椅子を？　そしてその素材は／
実測してみること、ときには三面図を描いてみること／自分に合った教材の発見

第七章 ひかりとあかり ……112
土地を読みながら光と陰を読む／安らぎの光は黄色い光／光の重心／
照度と明るさを分けて考える／空間に光のえくぼ／「集うあかり」と「個のあかり」／
光あれども姿は見えず／場のあかり

第八章 街並みと家周り ……130
境界線は外側から考える／家の周りを考える／門回りで住む人がわかる／
カーポートも庭の一部／アプローチは参道／庭は屋外の居間／ベランダも庭になる

〈コラム〉スケッチをしよう！ ……34

〈コラム〉パーティーを開こう！ ……140

良い本を読もう ……142

あとがき ……144

資料提供
宮脇檀建築研究室（著作権者／宮脇彩）
（本文中の図版キャプションまたは図版に＊印を付したもの。）

執筆分担
岩井達弥　第七章
木下庸子　第二章
杉浦伝宗　第一章
曽根陽子　第三章
中村好文　第六章
中山繁信　第四章、〈コラム〉スケッチをしよう！
諸角　敬　第五章
八木健一　第八章
矢崎梨恵　〈コラム〉パーティーを開こう！

◉学習方針

ライプツィッヒ工芸高等師範学校校訓の、

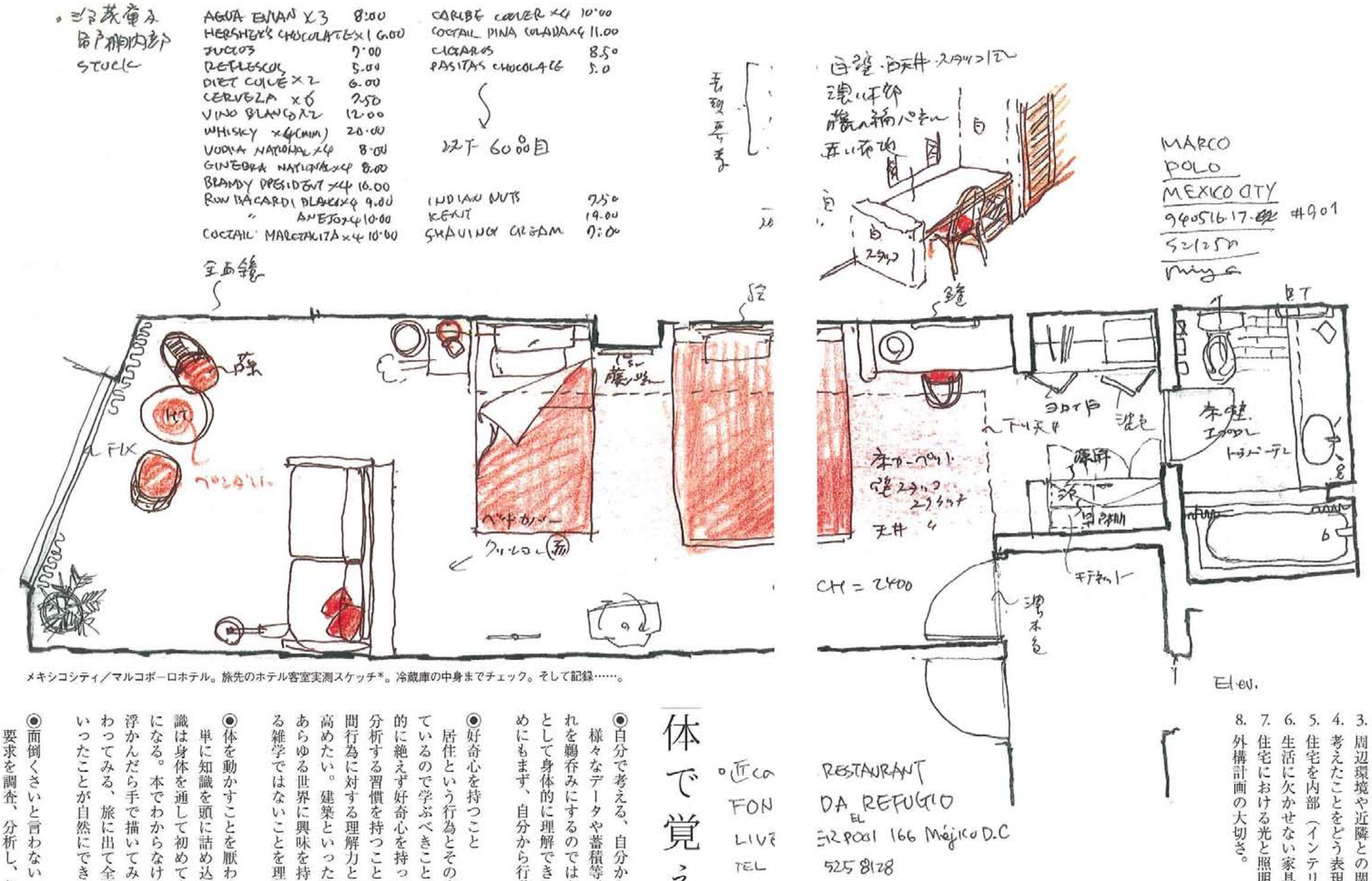
「眼を養い、手を練れ」

が、宮脇塾の学習方針である。

学習（テキスト）の内容と方針

◉学習内容

1. 住空間の考え方、コンセプトとは。
2. 敷地をどう読み取り、建物との関係をどう読み取るか。
3. 周辺環境や近隣との関係をどう考えるか。
4. 考えたことをどう表現するか。
5. 住宅を内部（インテリア）から考える。
6. 生活に欠かせない家具、大切な家具の配置。
7. 住宅における光と照明の考え方。
8. 外構計画の大切さ。



メキシコシティ／マルコポーロホテル。旅先のホテル客室実測スケッチ*。冷蔵庫の中身までチェック。そして記録……。

体で覚える

◉自分で考える、自分から動く

様々なデータや蓄積等、たくさんあるが、それを鵜呑みにするのではなく、必ず自分の実感として身体的に理解できるようにする。そのためにもまず、自分から行動を起こす習慣を持つ。

◉好奇心を持つこと

居住という行為とその空間は、すべて包含しているので学ぶべきことがあまりに多い。日常的に絶えず好奇心を持って周囲の事象を観察し、分析する習慣を持つことによって、少しでも人間行為に対する理解力と計画における判断力を高めたい。建築といった狭義の分野だけでなく、あらゆる世界に興味を持つこと。ただし、単なる雑学ではないことを理解する。

◉体を動かすことを厭わない

単に知識を頭に詰め込むことはやめたい。知識は身体を通して初めて身体化し、自分のものになる。本でわからなければ現場に出る、頭に浮かんだら手で描いてみる、確かめるためにさわってみる、旅に出て全感覚的に吸収する、といったことが自然にできるようにする。

◉面倒くさいと言わない

要求を調査、分析し、与件として整理し、コ

ンセプトを作り出し、必要なエレメントを拾い出しながら空間を構成する。それを様々な周辺状況への整合性を探し、建築や環境として構築していくという行為は膨大で、それでいて緻密で丹念でなければならない。面倒くさいという言葉は禁句とする。

模型を作ろう

設計の途中段階でまずイメージした空間をスケッチや簡単な平面図、断面図からラフ模型（スタディ模型）を作り、同時に周辺の状況もわかるよう、敷地模型も作ることが大事である。

次の段階では五十分の一さらに二十分の一、五分の一、一分の一へと詳細に三次元で確認していく。

コンピューターの三次元ソフトで、と考える向きが最近では多いが、やはり模型の迫力には勝るものがない。模型は最も確実な表現方法である。

良い建築を見よう

生活の知恵と知識。
良いモノを見る、教養を身につける。
調査、実測し、その中で体感する。
寸法、スケール感を身に付ける。
いろいろな国の文化、生活を知る。

スケッチしよう

旅のスケッチ。
実測スケッチ。
スケッチで空間を考える。
スケッチでディテールを考える。

ニューヨーク／マンハッタンのスケッチ*
旅先では朝早くから起きて、時間を惜しむように
スケッチを始める。

コーネル大学のスケッチ*
旅ではすぐ高いところに登り、まず全景を確認する。

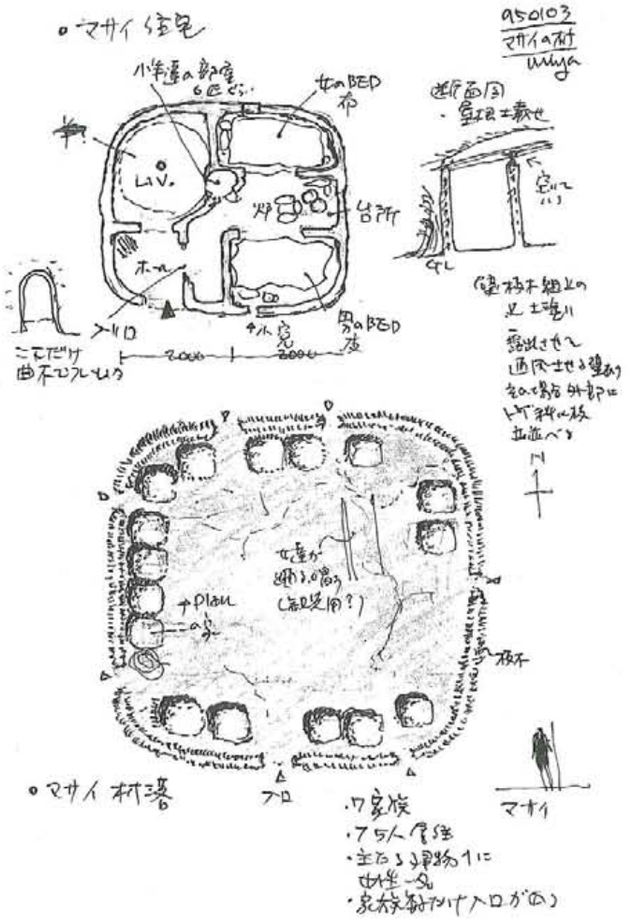
美術や美しいものを見よう

美術館めぐりをする。
歴史的建造物を見よう。
芝居、演劇、踊りも見よう。

よい家具に触れよう

クラフトしてみよう

木材に触れ、ノコやカンナ、ノミを扱ってみよう。



アフリカ／ケニヤ。マサイ族の集落と住居のスケッチ*
生活の様子がスケッチからも窺える。

手始めに、自分が今住んでいる住まい、空間を考え直してみよう

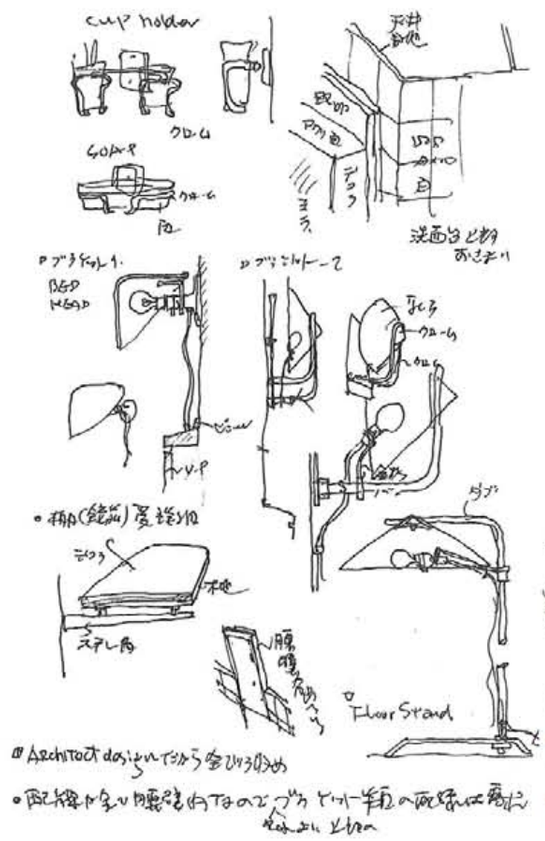
現在住んでいる家、または部屋の「気に入っている所」「気に入らない所」を考えてみよう。それらをより良くする方法、改善する点をリストアップし、平面図および部分スケッチで表現してみよう。

〈手順およびヒント〉

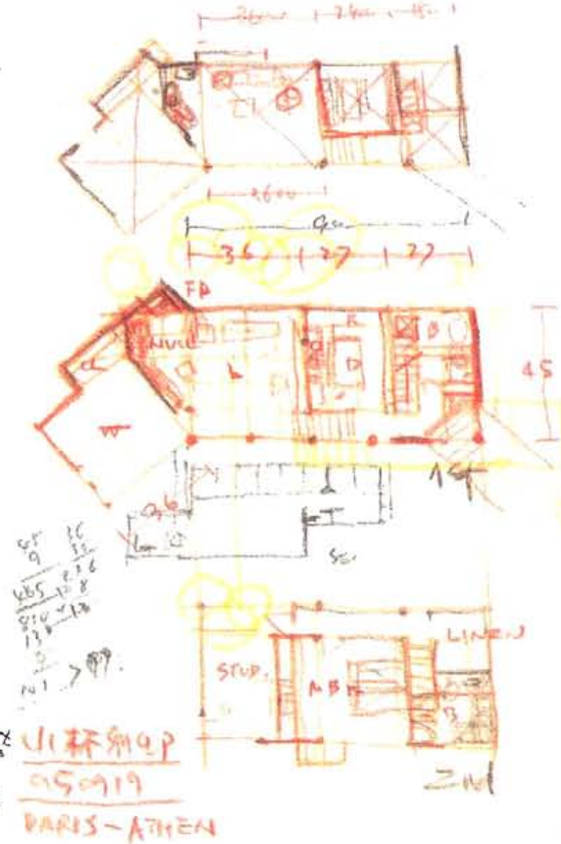
1. 現況プランの作成。
   縮尺百分の一から五十分の一。メジャー等で寸法を測定する。
2. 建物周辺（環境等）もできる限り記入する。
3. 改善箇所を重点的に、プランを考える。平面的だけでなく空間としてとらえ、光の入り方、風の通し方、隣家や外の景観も考慮すること。
4. 人の動線、日線の高さ等も考えること。
5. 家具等の寸法も測定し、配置も十分考慮すること。
6. 楽しくやること。

スケッチをしよう！

建物や風景を描くスケッチ*



家具や照明器具など、詳細な仕組みを写しとるスケッチ*



建物の平面計画を考えるためのスケッチ*

宮脇塾長がいつも学生に配布する資料の片隅には次のような言葉が書かれてあった。

「眼を養い、手を練れ」。

これは、「第一章　宮脇檀の住宅設計塾へようこそ」の学習方針ですでに述べているとおり、塾の校訓であった。

この言葉はモノを創っていく人間にとって大切な教えを含んでいる。優れたものをたくさん見ること、それが「眼を養う」ことであり、「手を練る」ことはスケッチをすることを示している。

スケッチには二つの意味があると思う。

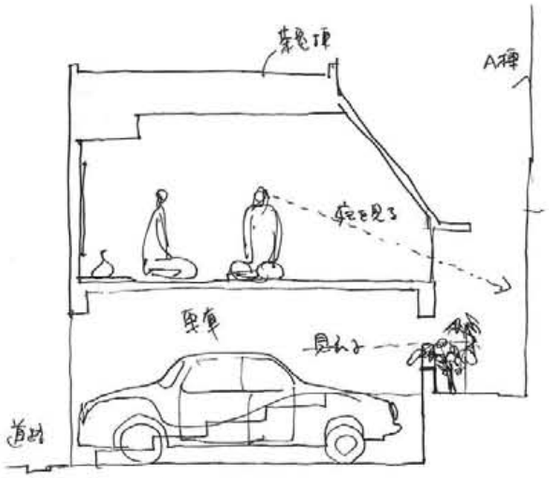
「メモをすることはそのメモが大切なのではなく、メモをした行為そのものが重要である」という話を聞いたことがある。いわゆる、描いたものよりも、描くという行為そのものが重要であると言っている。

このように、スケッチをする目的のひとつは、実際に存在するものを描き写すことによって、様々な形や仕組みなどを学習することである。確かに、うまい下手を気にせず、寺や神社などの複雑な建物をスケッチしてみると、その複雑な仕組みがよく見え、細かい部分まで頭の奥に記憶されるのである。ぜひ、試してみてほしい。

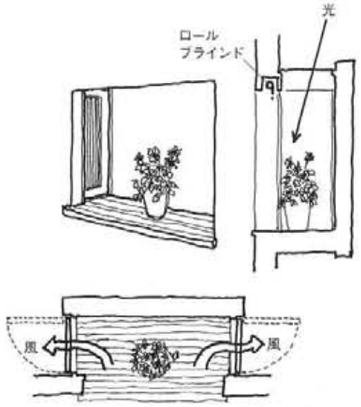
だが、読者諸君を含めて多くの人たちは「絵の得意な人がスケッチをするもの」。そう思い込んでいるに違いない。確かに、絵の苦手な人間にとって描くことは苦痛にちがいない。現に、私の友人で犬を描いても、パンダを描いても区別がつかないと悩んでいる気の毒な人がいた。彼にとっては笑い事ではないのだ。しかし、ここでわかっていてほしいのは、スケッチと絵とは少し意味を異にしているということである。絵については説明するまでもないが、スケッチの意味はモノを創るため、また絵を描くための下図を意味している。すなわち、建築を創作していくための下図である。したがって、評価されるのは完成した建築であって、スケッチは建築が創られていく過程のひとつの産物に過ぎないのである。したがって、本来、人に見せるものではないから、うまい下手はどうでもよいのである。

このようにスケッチの二つ目の目的は建築などを創作して行くときに、その造形や空間のイメージを形にしていくために描くスケッチである。建築の設計ではこれをエスキース(esquisse)と呼ぶこともある。

私たちが建築を設計していく過程で、イメージやアイデアを紙の上に描き、形にしていく。その行為は幾度となく繰り返される。そのときの創り手の心の動きが無意識のうちに手を通して紙の上に軌跡として残される。考え方やメッセージ、さらに迷い、葛藤、そうした心理的な動き、それらが滲み出てくるようなスケッチが人々の心を打つのである。うまい下手は問題ではないのである。



隣家の視線を遮り、中から見る坪庭*



光と風は入れるが、外は見たくない窓

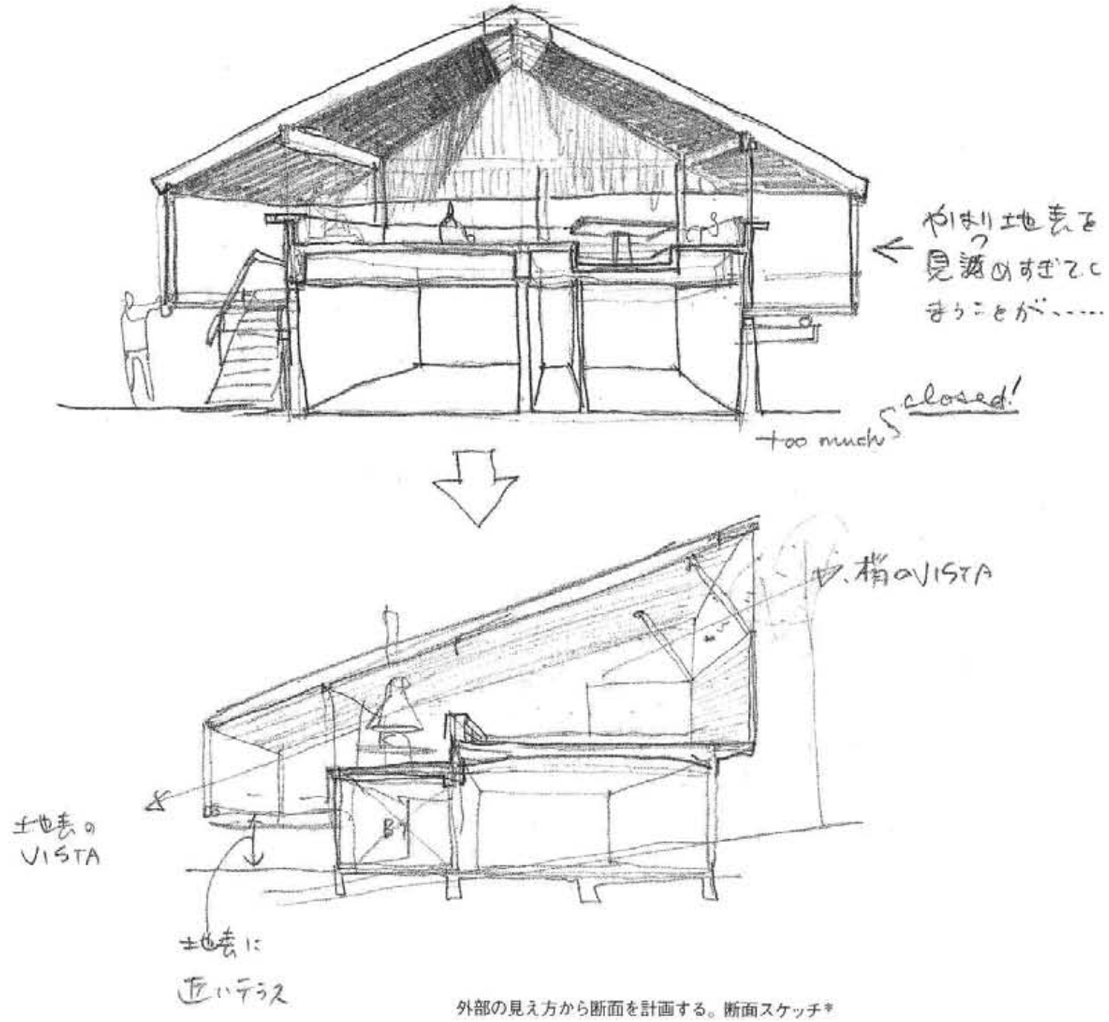
プライバシーを守りつつ、生活の気配を感じさせるエントランス回り。有賀邸パース*

「隠す」「守る」テクニック

見たい場所がある一方、見たくない場所もある。汚い街並み、店舗の裏側、隣家のトイレや浴室の窓、等々。リビングやダイニングなど、通常、人が居る場所からはそれらが見えない角度、位置に開口部を設ける。壁の向きや位置、袖壁など平面的な検討が必要な場合もある。

見たくないものが平面的に広がっている場合は、断面的解決が効果的。床や窓の高さを変え、垂れ壁や張り出したテラスなどで、見たくないものを遮る。植木や垣根などの植栽、簾、格子などの付属物、塀や物置などの外構も、見たくないものを隠す手段になる。

見ないことと対になるのが、外部の目からプライバシーを守ること。平面、断面で考え、外構を利用するなど、考え方は隠すテクニックと同じである。だが、他人の視線を気にしすぎると、周囲に閉じた住宅となり、冷たい街並みを作ることになる。明るい外部から暗い室内は見えない、遠い人の動きは気にならないなど、人間の心理を計算して、閉じこもりも常識の範囲にとどめたい。有賀邸（上図）のエントランス回りはプライバシーを守りつつ外部に人の気配を感じさせるあかりの漏れる設計である。



外部の見え方から断面を計画する。断面スケッチ*

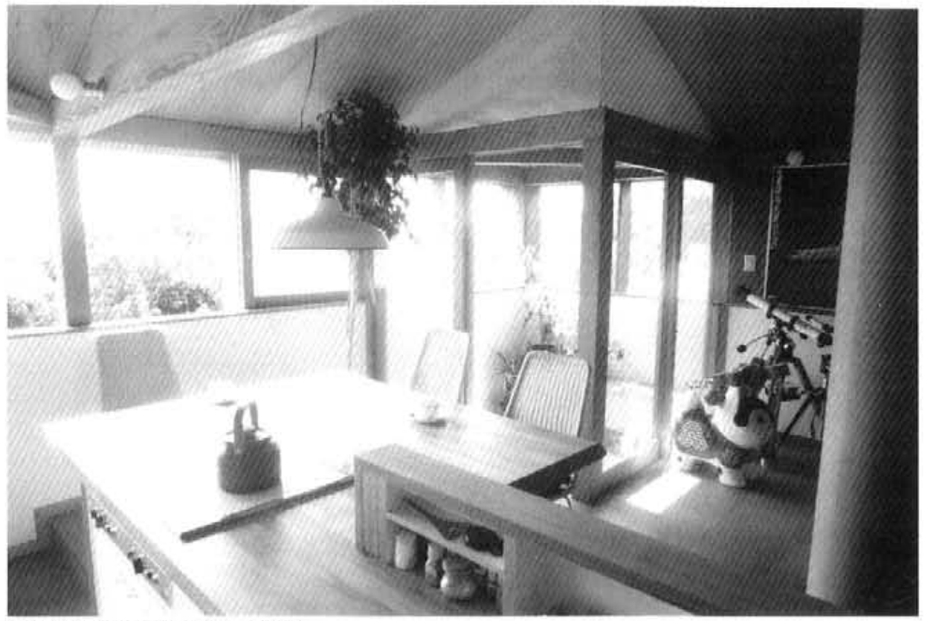
「見る」「開く」テクニック

見たい眺めのある方角や生活を展開させたい外部空間に向けて、開口部を設ける。桟や枠のない大きなガラス戸を入れ、外には花や緑、素敵な椅子でも置いてあれば、視線はひとりでにそちらを向くだろう。ただし、良い眺めだからと真正面にどーんと富士山を見るような開口部ばかりでは単調になる。廊下の突当りに見える緑、高窓から見える空、小窓からの湖など、変化に富んだ開き方、見え方を工夫するのが設計だろう。

上の図はある別荘の外部の見え方を検討しているエスキースである。上の案ではどの場所からも地表ばかり見てしまうことが問題である。

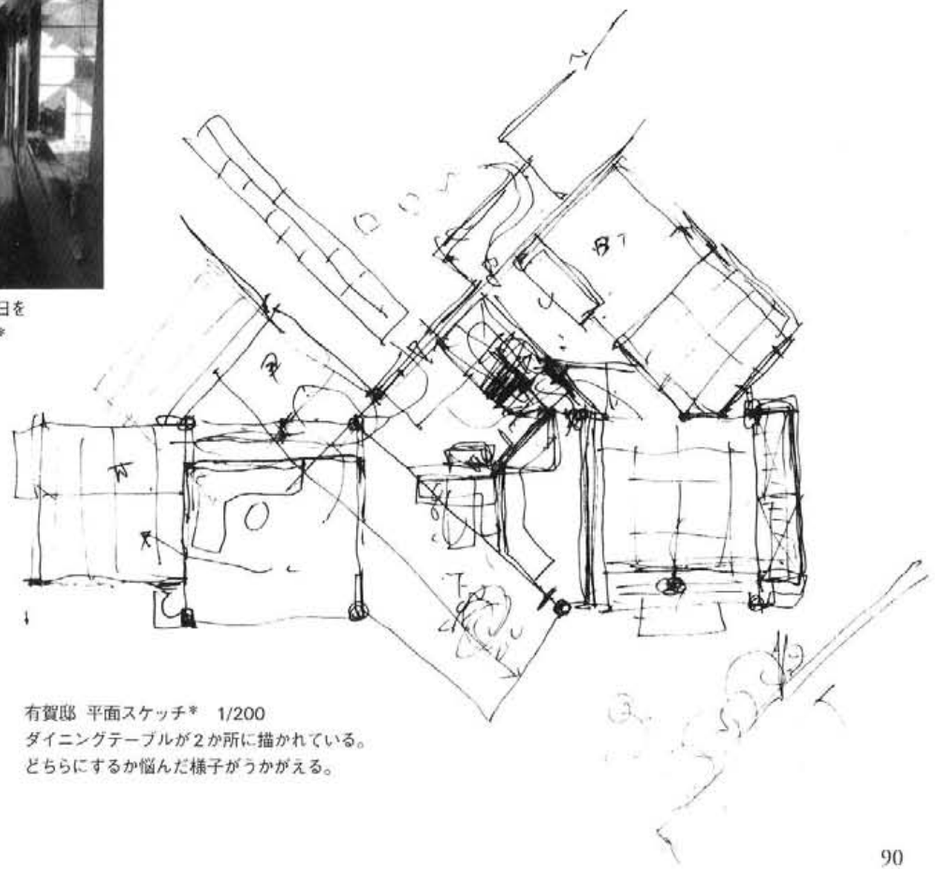
市街地にある狭小敷地では、一階にいる人の目の高さで良い眺望の得られる場合は少ないから、良い眺望を得る方法を考えなければならない。二階リビングはその工夫のひとつである。公園や隣家の樹木、遠くの景色など、何であれ見るべき場所が見つかれば、ともかくそちらに開口部を設ける。どこにも良い景色がない場合は、自分の敷地内にその場所を作るしかない。垣根で囲まれた庭、小さなプール、中庭等々。トップライトだって、空を見るための大きな開口部と考える。

食べるところを考える

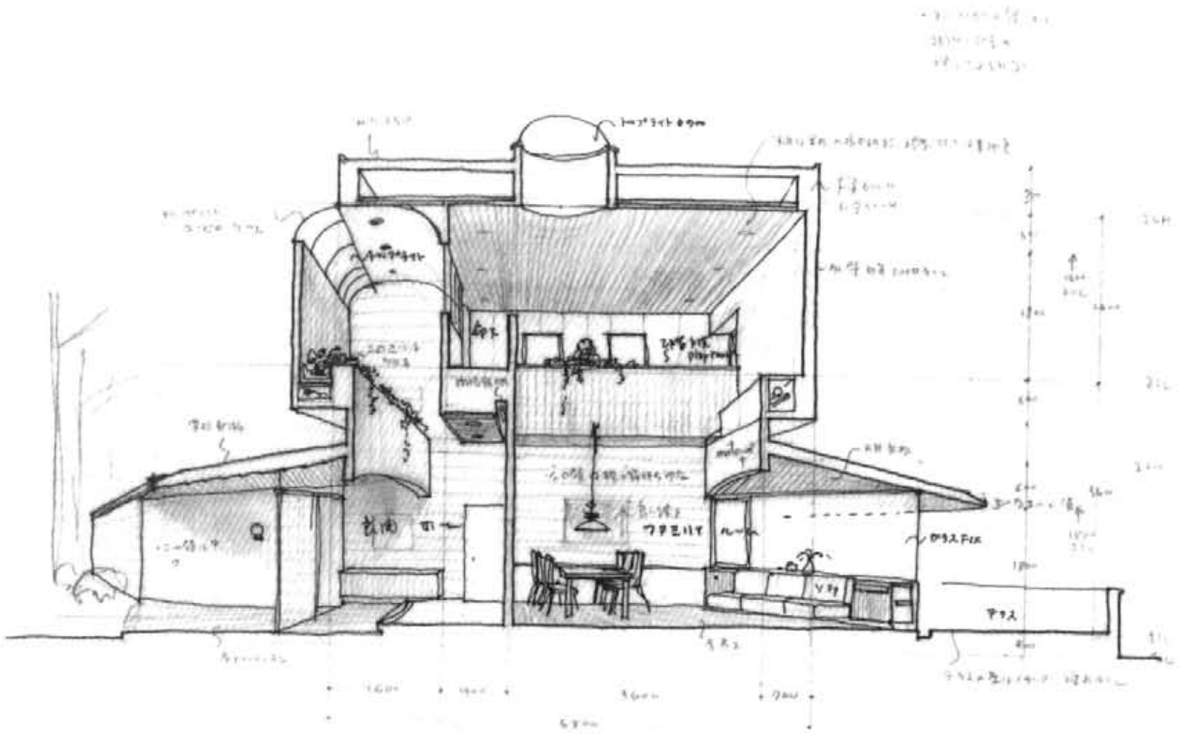


朝日の入るダイニングキッチン。森邸*

中庭から間接的に朝日を採り入れる。中山邸*



有賀邸 平面スケッチ* 1/200
ダイニングテーブルが2か所に描かれている。どちらにするか悩んだ様子がうかがえる。



有賀邸矩計パース* 1/100
断面上にトップライト、ハイサイドライトなどを設け、ダイニングに光を入れる。

◉ダイニングルームで朝日を感じる

普段朝食をあまりしっかりと摂らない人も、出張で出掛けたホテルのダイニングルームで朝日に当たりながら気持ち良く一日を始められた経験のある人は多いと思う。観察するまでもなく、朝、食堂に現れたビジネスマンは若い者、年取った者関係なく、窓辺の朝日が気持ち良く射し込む席へと足を運ぶ。宮脇の言うように、また私の個人的な経験からも、朝日のあふれるダイニングは一日の始まりにふさわしいと思う。

宮脇の師、吉村順三は良い空間や良い平面計画をされているものを「気持ちが良い」という表現を使った。簡単な言葉なのだが実に奥深い言葉で、見て気持ちの良いもの、さわって気持ちの良いものなど、その対象は様々である。宮脇自身もかなり気になる言葉だったようで、『吉村順三のディテール――住宅で矩計を考える』（彰国社）の中の吉村順三との対談で真っ先に話題にしている。この朝日の当たるところにダイニングをつくる、ということもまさに「気持ちの良い」空間づくりにほかならないと思う。読者のみなさんもいろいろな経験をして心地良く感じたり気持ち良く感じることがあるはず。設計を志すようになったらその経験を一度自分自身の言葉で翻訳し、気持ちの良い住宅づくりに生かしていくようにすると良いと思う。

ダイニングルームに朝日が当たるように設計するのは宮脇事務所のマニュアルでもあった。しかし、無理にダイニングを東に持っていった